唐紙（襖）障子

唐紙（襖）は始めは障子と呼んでいたようである。

そして襖の出現も古い事で、平安初期の美術も仏教もまた文学のうえでも唐風模写とちがつた独創の要素があ

らわれ貴族の邸宅として母屋の寝殿と東西の対屋（たいのや）、釣殿とを廊下でむすび、中庭に池をつくるなど唐風から脱却した寝殿造りが発達した。その建物には仕切りがなく必要に応じて、これをふすま（障子）やついたて（几帳）でしきつた。この襖やついたてをより美しくしたい要求から唐絵を脱した大和絵が生れた。

（世界年表）にある六十六代一条天皇長保三年五月藤原行成をして清涼殿障子に書かせしむ。とある障子は今いう衝立或は唐紙の事であらうか。

（大鏡）に

・・・・御障子のもとにてさるべき職事蔵人などして奏させ給ひ・・・・・

（枕の草子）春曙抄

清涼殿の事委しるさせ給へるに、北に荒海の障子あり、　南の方に手長足長、　北西の障子は宇治の綱代墨絵、二間と上の御局との間に昆明池の障子を立。

とあり、年中行事の障子とは、古清涼殿の弘廂にあり、年中恒例の公事を書いた衝立障子で、藤原基経の調進したものという。

また

西京のたいのほどにまらうとにもいとおかしう、屏風そうじのゑも見所ありてすまひたり・・・・

とある。これらの障子は布帛や厚紙を貼つたもので今いう唐紙（襖）のことであらうか。

大和国生駒郡法隆寺村にある法隆寺は推古天皇の建立であるが、日本書記によると、天智天皇の九年四月に焼失したとあり、現在のものは和銅年間の再建であるとの説もあるが、この法隆寺の絵殿に聖徳太子の伝記をかい

た障子がある。

（百万塔）の記事に

この唐紙は唐国の紙をたうしというそれにはあらじ、これは今の世にも衾障子にはる、紋ある一種の紙あるそれなるべし、これを唐紙というよしはひまなく紋のありて、よのつねの紙とはそのさま異なればなり、すべてよのつねなると、ことなる物をば唐某という、つねのことなり、さていにしへに障子といえるは、多くは衾障子のことにて今いう障子は、あかり障子なり、さてまたふすま障子というよりは、衾をひろげたらんやうに張りたる故なり、今の世にはこれを、ただふすまとのみいうは庖丁刀というべきを、庖丁とのみいうと同じたくいの省名なり、またこの衾障子をから紙ともいうは件のから紙して張りたるよしにて唐紙障子のはぶきなり。

（本居宣長「玉かつま」より）

とある。

庖丁については中国の戦国時代、梁の文恵王のところに庖丁つまり庖の丁という料理の名人がいた、彼れが刀をもつて牛を料るときのその巧さに文恵も感嘆したという。

いま国語で料理用の刃物を庖丁というのはこの人の名の転訛したものであるという。

徒然草に

園の別当入道は、さうなき庖丁者なり、ある人のもとにて、いみじき鯉を出だしたりければ、皆人、別当入道の庖丁を見ばやと思へども・・・・

とある。

（徒然草）に

相模守時頼の母は松下禅尼とぞ申しける守をいれ申さるることありけるに、すすけたるあかり障子のやぶればかりを禅尼手づから、小刀して切りまはしつつ張られければせうとの城介義景、其の日けいめいして候ひけるが「たまはりて、なにがし男にはらせ候はむ、さようのことに心得たる者に候」と申されければ「其の男、尼が細工によもまさり侍らじ」とてなほ一間づつ張られけるを、義景「皆を張かへ候はむは遙かにたやすく候べし、まだらに候も見苦しくや」と、かさねて申されければ「尼も後はさわさわと張かへむと思へども今日ばかりはわざとかくあるべきなり、物は破れたる所ばかりを修理して用ゐることぞと、若き人に見ならはせて、心づけむためなり」と申されけるいとありがたかりけり・・・・・

とあるので当時（約七百年前）数種類の障子があり布帛や厚紙を貼つた遺戸障子を襖あるいは唐紙とよぶようになり、書院が出来てから紙を一重だけ貼つた、即ち現在のような障子も出来た事が知られ、それをあかり障子といわれていたことも知る事が出来る。

また狂言に

すきはり障子を、するりとあけ、するすると御出で有つて

とあるは透張りか、あかり障子のことであろうか。

寝殿造りには障子、遺戸障子を用いず書院造りに障子を用いるといわれるが日本間のみなもとの書院造りの最も古いものとして名高い銀閣寺は、足利義政が祖父義満の金閣寺にならつて建立をこころざし、完成しないうち

に死去したが、この銀閣寺の中の茶屋に腰高障子をみる事が出来る。

これは後花園天皇（百二代）約四百九十年前のものであるが鎌倉時代の建築に書院が出来、そこに明障子が出来たのが始まりと考られている。さてこれ等巻紙、経文本、襖、掛軸、障子など表具の仕事に刷毛が使はれ始めたのはいつ頃からであらうか。書院造りも始めは一般民衆のものではない、上級武士だけのものであるが、構造が玄関、床の間、違い棚、天井に板を張り室内に畳をしき、襖や障子で部屋をくぎる、床の間には掛軸を飾るという、この書院造りが今にいたる日本式家屋の基本であり、これが庶民化する事により襖、障子、掛軸の用途を増し、その製作に修理に、刷毛の要求が増加したこともまた当然であろう。

絵画の流行発展は直ちに表具の進歩発展となり、更に刷毛の製産にも及ぶのであるが、絵画そのものにも刷毛が使われているので、古くは「日本画沿革史」が数種挙げている我が国上古の図画の一つに

・・・・其質皆腐朽し去り、又丹亜類の絵具も、亦多くは剝落磨滅して今日に遺存するもの至つて稀少なり、これが為に上代の美術中、図画は最も其徴を得るの材料に乏し、今聯か現時に遺存する装飾模様の類を挙ぐれば

石槨内模様　筑後国浮羽郡若宮日岡

此の石槨内の模様は朱を以て画かれ二重輪、三角形、蕨の芽の如き形、舟字形などを或は整例せしめ、或は乱点したるものにて、凡そ一個の文様、其大さ径一尺六寸より二尺に達し、刷毛筆を用ひて描き、殊に輪形は全く規円を使用せしものにて、正しき円形をなせり。

とあり、上古既に図画に刷毛を使用せし事が立証されており、くだつて奈良、平安時代の絵画にも刷毛の用いら

れた事を斯界の大家が認めており、徳川時代に刷毛を使つた画家の記録もある。

筆を用いず刷毛をもつて絵を描いた記録として、谷文晁について

加藤文麗に就て画法を修め且つ宋人牧渓及雪舟、探幽の筆意を慕ふて自ら一家の機軸を出し田安家に仕へて画師となり、禄五百石を玉ふ、其山水人物花草を画くや、精妙ならざるはなし、殊に金碧法を巧にし、水墨の妙亦神に入る、実に一世の傑手なり。

嘗て明石侯江戸の邸にて、近親の諸侯を饗応ありし時、其座興にとて谷文晁を招き席画の用意を為し置き竊かに思へらく、文晁の画才は己に聞ゆる所願くは難を構へてかの文晁を苦しましめんと、故更に揮毫を命ぜずして酒を勤め、時、申牌に及ぶ頃、文晁に向ひ筆なくして、意匠を写さんことを望み、侍臣に命じて巾八寸の大刷毛一柄を出さしめしに、文晁快く承諾し、随へ来れる門弟を呼び、大硯に墨を磨らしめ、自ら己が前なる供膳の皿三枚に墨汁を容るること濃、淡、中の三種を以てし、少時絹上を注視して、後、かはるかはる、かの三種の墨汁を灑き、而して其絹を壁によせて乾くを待ち、やや点燈に及へる比、かの大刷毛を以て淡汁を一抹せしに、忽、暮山の景色宛然として真況を現出せり、是に於て明石侯歓賞措かず、手を拍て曰く、翁の名を聞くや久し、然かれども今に於て其の超凡の画才を見る。

とあり、また葛飾北斉についても

葛飾北斉は名古屋の永楽屋に聘され、北斉漫画を揮せし時偶々噂せるものあり、北斉は画は上手なれども、迚も大画は描けまじと云ふを聞きて大に憤慨し、あはれ大画をものして市民を驚かさんとて、町々の辻に張り紙し、来る幾日、本願寺掛所境内に於て、大画揮毫候間御遊覧被下度候、京都旅客北斉申すと、

広告したりければ市民挙て来り見るに境内一面に紙を布き、箒よりも大なる筆を執り、墨汁は手桶より点して縦横に筆を運ばし、更に又紅からの解きたるを杓にて注ぎ、大刷毛にて夫れを引延し、画き終て予て設けある足場上へ轆轤にて其紙を捲上げ見れは、達摩の半身こそは現はれたれ、其の大なること髯一本の大さ二尺巾位ありし、と伝えられている。

他の糊刷毛以外の各種の刷毛の出現や表具に関する他の資料から考えて糊、刷毛は奈良朝時代から表具に使われたものと、推定され往時の筆の出来栄えと比較して刷毛も完全なものが作られるまでの進歩を示しておつたものと考えられる。

奈良平安時代、その邸宅、調度、服装ともに華奢にして優美、日夜歓楽を追うにいとまなかつた貴族達のために調へられた各種工芸品は世界の驚異とまでいわれておるが、その蔭に刷毛がひそかに、然かも極めて重要な役割を果して居つたであろう事が推定されるのである。

（事物起源考）は

延喜式に「大豆五斗糊料」という記事が見えており、大豆が糊のもととして用いられていたのであるが同時に糯もすでに屏風などを貼る為めには糊化して用いられていたのである。（約千三百年前）

と伝えているのであり、大豆、麦、糯などが糊の材料であるが、そのほか蒟蒻糊や蕨糊などから、なめくじ糊も使われたという。

古い仏像の製法に脱乾漆法というのがあり、これは其の仏像の原型を水がつけばすぐ溶けるような粘土で作り原型の上に紙を何枚も貼りかさね適当な厚みになつたら内部に水を入れて体内の粘土を溶かし出す、これらに使

う紙は楮、三椏などを原料にした紙を貼り重ねる、糊は蒟蒻糊、蕨糊などを使うが、なめくじ糊も使つたという。なめくじ糊とはなめくじをすり鉢に入れてすり粉木ですりつぶしたものを糊として貼り合せる。これらの糊は水に対して不溶解性であるので都合がよいのだという。これらの紙の貼り重ねに糊刷毛、撫刷毛が重要な役割を果したであろう事は推定にかたくない。

また現代でも表装用の糊は古いものほどよく京都の表具屋は糊を壺に入れ、椽の下に貯え、その上ずみのよく枯れたものを使うという。

表装に対して表具という名称が用いられたのはその仕事が盛大になつてきたためであろうし、それが三百八十年前頃からとあるが最も盛んになつたのは江戸時代になつてからのようで、この頃の刷毛製造者が刷毛師の名称で呼ばれていた記録もあり、当時より現在に至る迄代々続いている刷毛業者もあるのである。（ブラシ欄参照）

東京高輪万松山泉岳寺は人も知る赤穂義士の菩提寺、寺内の義士遺物館に堀部弥兵衛の書いたという刷毛屋の看板が陳列されている。刷毛の形をかいたものであるが、この看板に「おろし」の文字がみられる。

浅野浪士の吉良邸討入が元禄十五年で、この看板はそれ以前に書かれたものであろうが、鎌倉時代以後の傾向として、商工業は自由企業の風潮となり、室町時代の歌合せや絵巻物などで知られる当時の職業のうち刷毛に関係あるものをあげてみると

形置師、鞍細工、鞘巻切、纐纈（こうけつ）師、矢細工、弓作、傘張、枕作、扇屋、冠師、経師、摺師、沓造、紙漉、畳紙師、仏師、絵師、塗師、蒔絵師、唐紙師

などがあり、これより桃山、江戸と時代がくだるにつれて刷毛を使う職種がふえ、その発達は大都会のみに集中

せず、地方にも及ぶ。さらには職業以外の素人の各家庭における障子やあんどん修理、衣料の洗張りなどにもつかわれる。江戸における繁栄は寛永の終り頃からで、島原の乱が終り、世が泰平になり、諸大名の参勤交替がはじまつて、江戸に大名屋敷が多く出来、地方武士が土着して消費生活をはじめるころからである。盛況といわれるようになつたのは元禄以後のことといわれており、江戸八百八町に町人だけで元禄六年に三十五万三千人、享保九年に五十八万三千人、天明七年に百三十六万七千人、それに武士を加え旅行者を加えると当時すでに世界的な大都市であつた。この頃すでに刷毛の事業も発展し、製造卸業者と、それを仕入れて売る小売業者とがあつたであらう事が、これによつて推測されるのである。

徳川時代に至つて近世小説界の大立物、井原西鶴が経師をモデルにして好色五人女（おさん茂右衛門）が刊行されている。

京の烏丸通四条下ル町の大経師意俊の妻おさんが、手代の義兵衛と密通して、丹波国に転落した所を捕えられて、磔に処せられた事件、（京都所司代の判決書留に拠る）に脚色を加えたもので、奇しき運命に弄ばれて、知らず識らず罪悪の淵に落ちて行く、苦悶に満ちた複雑な悲恋を巧みに描き出されおり、これは（大経師昔暦）として近松の浄瑠璃にも仕組まれているが、その事実は天和三年の出来事といわれ、西鶴の好色物の傑作である。

奈良、平安、鎌倉時代は絵画の区域も屏風、壁、仏像、巻物、扇面等に止まり、之を手にする人も亦、其区域が極めて狭く、公卿にあらざれは僧侶等と限定されていたが、江戸時代に至り、その初期は戦国の桃山時代の延長の観があつたが、元禄を過ぎ後半の時代は全く外寇もなく

有がたさ八百八丁高まくら

と無事太平を謳歌しつつあつたので、その影響もあり、幕府の紀綱漸く弛み、一般社会の風俗も奢侈に傾き、一面階級社会の矛盾に対する庶民の反撥と享楽主義の発展を招来した。この頃、文学はそのあらゆる種類を網羅して残すことなく、俳文、狂歌、及び戯曲、小説等、人の嗜好を楽ませるものが大いに行われ、此の嗜好に応ずる絵画も様々の流派を生じ、社会万人の嗜好に適合する絵画の興る処となり、これを楽しむ区域も貴賤上下の別なく之を弄ぶ事となつた。書画は書籍に額に屏風に掛軸に襖に仕立てて鑑賞せられるため表具の職域を増した。

更に一般に華美を好み衣裳調度も極めて花やかで、衣裳の文様も多くは紺屋染を用いた。一方浮世絵板画も隆盛を極め、一般家庭でも障子、あんどんの張替は各自が行う風習が往時あつたことから見て、当時刷毛卸業の存在したであろうことは当然な事であろう。

日光、鎌倉とともに関東における三大国宝群地として有名である武蔵国川越の天台宗古刹星野山無量寿喜多院（「国宝」天長七年「千百十四年前創建」）に所蔵せられる「重要文化財」狩野吉信筆

職人尽屏風絵

に（経師）というのがある。経師が刷毛を使つて仕事をして居る図であるが往時の風俗を現わし、其の時代を研究する最上の参考資料であるといわれておる。（経師）のほかに（扇師）（形置師）などの刷毛使用の図もあるが、狩野吉信は寛永年代の人であつて死没の時が今から二百八十七年前となつているので、この絵は三百年位も前のものであろうか。

また天明元年より政美の名を用いて武者絵及び浮世絵に特色を示した北尾重政の門人で、のちに鍬形を改姓した鍬形蕙斉代表作といわれている文化二年作

近世職人尽絵詞

の中に表具師が刷毛を使つて仕事をしている図が　かかれているが、この時代も現代も経師と表具師とは一つものと、解釈されているもののようである。

（百万塔）に

京都の表具屋では何れも店先に掛け看板が下り大概達磨の像が画いてあります。

加賀金沢、越中高岡にも同様の看板がございます。

遠江寿町では一枚の障子に表具師と書き、一枚の障子に達磨の像を面いたのを見ました。達磨は座りがいいとの譬、又は糊（法）の道に精しいとの隠語であらうと或人は申しました。

とあるがこの表具屋の達磨の看板は国内各所でみることが出来、東京でも見かける事がある。

表具師も現今ではその数が東京だけでも六百にのぼり、それに従業員を加え、また組合に加入していないものを加えれば千五百名に及び、日本全国では八千人乃至一万人と推定される。製本業者は東京都内に二千軒。非公認千五百軒、計三千五百軒位、国内で一万軒位と推定されている。

表具師の使用する刷毛は

糊　刷　毛

撫　刷　毛

水　刷　毛

株椹撫刷毛

打刷毛

等であり、このうち糊刷毛、撫刷毛は古くは鹿毛の刷毛が用いられて居つた（刷毛の語源参照）ようであるが、今から三百年位前に作られた筆「玉川奥沢九品山浄真寺」の寺宝

武州江戸室町二丁目
福本因幡守作
「大名号大筆」経約四寸

に熊毛が使われているところからみて此のころには刷毛にも熊毛が用いられていたものと考へられる。

今では糊刷毛は熊毛に限られており撫刷毛は明治後期迄、鹿の（夏毛）に限られておつたものであつたが鹿毛の良いものが少なくなつたので、現今では羊毛で作られたものを多く使つているようである。

昔は、糊刷毛以外の刷毛は特定の職業者のみが使用する場合が多かつたようだが、糊刷毛に限り各家庭で障子、襖、あんどんなどを素人が修理するために用いた。それがまた、数量としては業者が用いる数を遙かに凌駕し極めて大量に製産された。品質としては値の安い事に重点を置いて作られたため、粗末なものが多かつたようである。

これに用いた毛も鹿毛を主とし周囲に馬の胴毛を巻いたものを毛縄（人毛を撚つた紐）で綴じたもので、これは明治末期迄製作されておつた。

現今も素人用の糊刷毛は値の安い使いよい、丈夫な、と色々に勘案され、数多くの種類が作られている。

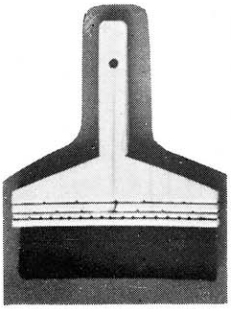
表具師が用いる刷毛は、表具師も刷毛の鑑別に長じており刷毛業者としては最高の材料で最も念入りに作る事

がたてまえとなつている。特に糊刷毛は表具師用に限り寸筒柄の九分毛といつて毛の長さ九分に作られており巾は五寸と限られておつたのであるが最近は六寸巾のものや七寸巾のものなども使われている。

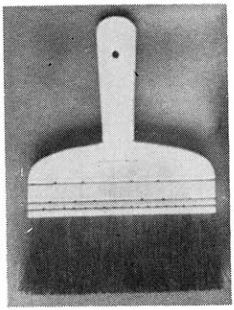
表具師はきわどい糊付けの仕事をするので、どんな良い刷毛でも新らしい間は下貼りなどに使い、使い込んで来ると毛先がかみそりの刃のように薄くなるので、それからがきわどい仕事への使い時である。この使い込んでから良い調子になるということは糊刷毛ばかりでなく塗装用其他の刷毛も同様である。

糊刷毛は表具師以外に其の用途は極めて広く、他の項にある団扇、扇子、傘、堤灯其の他、花札、かるた、紙箱、張子人形、張子動物、天狗その他の張子面、だるま等、信仰に基く置物或は玩具など郷土色ゆたかなものが国内いたるところで作られているが、張子玩具の著名なものを挙げると伊達藩士の松川豊之進という人が作りだしたという松川だるまを始め

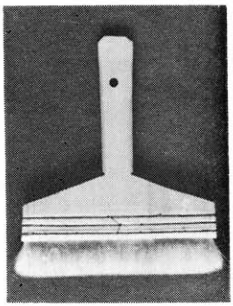
仙台	松川だるま
秋田	だるま
福島	起上り
高崎	だるま、猫
三春	人形
豊橋	面
三重	狸



糊刷毛

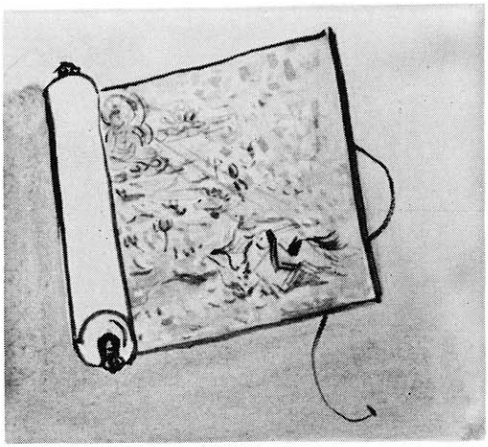


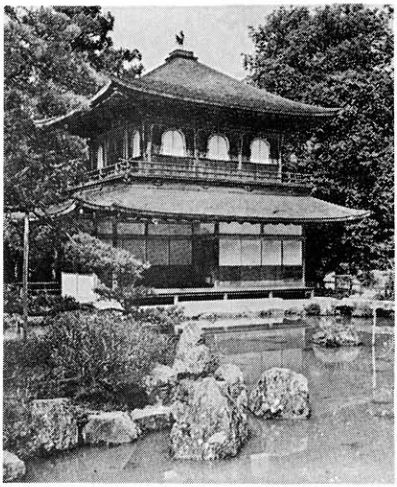
抹招撫刷毛



撫・水刷毛

経巻





銀閣寺

だるまづくり

民芸張子の玩具

出雲張子虎（今市）

経師

はけやの看板（堀部弥兵衛書）

清水　虎
出雲　虎
広島　張子
熊本　虎

などそれぞれ古い縁起にもとづくものであるが奈良唐招寺の宝扇は天平時代の縁起であると（郷土玩具）が伝えており、これらの加工染色に刷毛の使われたこと云うまでもない。

糊に縁のあるものの一つに紙子がある。紙子は紙衣ともいい紙を貼りつないで柿渋を塗り夜露にさらして臭気をぬき、それを揉み柔げて衣服に作る、また紙衾（ふすま）というのはこの紙を皮にして打藁（わら）を入れた蒲団である。これを使いはじめたのは平安朝の頃といわれ

（徒然草）に

・・・・・紙の衾麻の衣一鉢のまうけあかざのあつ物いくばくか人の費（じゅう）をなさん・・・・・

とある。

紙子は紙を長く継ぎ合わせて一反として、そして衣服に仕立てるので衣服の仕立に針、糸を用いない。そのため女の手を経ないので、仏僧が多く用いたと伝えられておるから、紙子の衣服も蒲団も、その裁縫、仕立には刷毛が重要な役目を果していた訳である。

富本の

（春夜障子梅（はるのよひしようじのうめ））「夕霧」天明四年森田座初演

に伝えられている、伊左エ門が夕霧がもとへ通いつめたが、里の金にはつまるがならい、勘当うけて尾羽うちからし紙子の羽織のみすぼらしい姿で吉田屋の門口をゆききした。その台詞に

・・・・・さりとては紙子ざわりがあらいあらい引けば破るる・・・・・

とある。

有る程の伊達為尽て紙子かな

という句のあるように、紙子姿はそのころ道楽のはて、勘当された者の姿とされていた。

その為めか江戸酒落本などにも紙子はおちぶれて貧しいものが用いるもののように書かれているが、豊臣秀吉も紙子の羽織を着用したとあり特に昔の旅行には軽い事と風をとおさぬ特長があるので元禄時代には紙子、紙衾、紙帳、紙合羽なども作られ広く一般に用いられたのであり、芭蕉の奥の細道に

痩骨の肩にかかれるもの先づくるしむ、只身すがらにと出で立ちはべるを、紙子一衣は夜の防ぎ・・・・

とあつて長途の行脚の夜寒を防ぐ用意に軽い紙子をたづさえた事がしられる。

寿永四年三月二十四日、さしもさかえた平家の武運もつきて、平知盛以下多くの人々が西海に沈んだ。清盛の妻二位の尼も安徳天皇を抱いて入水し建礼門院（清盛の娘、高倉天皇の皇后、安徳天皇の御母）も入水したが源氏の軍に救われて京都につれもどされ、二十九才で出家、大原の里の寂光院において念仏三味の生活を送られていたが、後白河法皇（高倉天皇御父）が建礼門を慰めようと訪れた時のことを平家物語は

さてかたはらを御覧ずれば、御寝所とおぼしくて、竹の御桁に麻の御衣、紙の御衾など掛けられたり、さしも本朝漢土の妙なるたぐひ数を尽くして、綾羅錦繡の粧も、さながら夢になりにけり、供奉の公

卿、殿上人も、おのおの見参らせ給ひしことなれば今のやうに覚えて、みなそでをぞしぼられける。

とかつてのはなやかな女院の日常とかわり紙の衾をもちいておられたことがしるされている。

紙帳とは紙でつくつた蚊帳で空気が流通しないのでこの中は温かいが

己が罪おのれをせめる紙帳の屁

と都合のわるい面もあるようである。

めし粒で紙子の破れふたぎけり　　蕪　村